

資 料

統合カリキュラムにおける地域看護学実習の学習成果と課題

Learning Outcomes and Problem of Community Health Nursing Practice
in the Integrated Curriculum

魚里明子, 森田智子, 中世古恵美, 神山幸枝
関西看護医療大学 看護学部 地域老年精神看護学

Akiko Uozato, Tomoko Morita, Emi Nakaseko, Yukie Kamiyama
Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Community Health, Gerontological & Psychiatric Nursing

要旨：【目的】本学の地域看護学実習の学習の成果と課題の明確化を目的として、学生126人の実習記録・課題レポート・カンファレンス発表結果の内容から学生の目的・目標の到達度を分析した。【結果および考察】本学の地域看護学実習に関しての実習目的・目標は、ほぼ達成できていた。課題としては、①在宅看護実習では、看護過程の展開や在宅看護技術の獲得が難しい ②ヘルスケアシステムを含めて地域看護管理の視点が弱い ③健康増進や予防といった疾患を持たない健康な人への看護活動をイメージした上で実習に望むことが困難、ということが明らかになった。【今後の取り組み】①在宅看護論での技術の獲得のための実習時期の検討と看護過程展開の学習支援のための実習後のカンファレンス内容・方法の検討 ②在宅・病院・施設・地域での看護職の役割や連携のとりかた、地域に存在する関係機関の役割とネットワークといった地域看護管理の視点を強化するための関連施設の実習の導入 ③各論実習の前に健康な人々とふれあえるような場の提供、である。

キーワード：統合カリキュラム, 地域看護学実習, 学習成果, 保健行政,
訪問看護ステーション

Keywords : Integrated Curriculum, Community Health Nursing Practice,
Learning Outcomes, Health Administration, Visiting Nursing Stations

I. はじめに

大学における看護教育は、平成9年度のカリキュラム改正によって、4年間で看護師と保健師の教育を同時に行う統合カリキュラムが主流となり、本学の地域看護学も統合カリキュラムの趣旨にそって展開している。

平成9年の指定規則には「地域看護学概論は、公衆衛生看護及び継続看護の基本理念と目標を学び、地域における看護活動の基本的知識及び考え方、地域を基盤とした予防の考え方及び行政的対応を学ぶ内容」と説明されている。統合カリキュ

ラムによる地域看護学は、行政、在宅看護、学校保健、産業保健の4領域をさしている。

近年は、統合カリキュラムによる地域看護学の利点として、「看護師教育の幅を広げる」という点が強調されてきたが、保健師教育においては、公衆衛生看護学が明確に教えられないという問題点もクローズアップされている(村嶋, 2009; 安齋, 2009; 小山田, 2009; 大場, 2008; 小西, 2006)。また、在宅看護に関しては、地域看護学の一領域という分野であるという考え方ではなく、社会背景の変化により独立した科目として位置づ

けられてきた。平成9年に看護基礎教育で「在宅看護論」として新設され、平成19年の指定規則の改正では、看護教育課程の看護の統合分野の位置づけになり、よりいっそう在宅看護への期待が高まっている。

統合カリキュラムにおける地域看護学実習の学習成果と課題については各大学の報告が多くある。その中で、保健師の家庭訪問や健康教育、地域診断に視点をおいた学習成果に関する報告（菅原ら、2008；五十嵐ら、2007；藤丸ら、2006；大川ら、2006；伊藤ら、2004；辻ら、2004；石田ら、2004）や保健師教育の技術項目の到達度に関する研究（藤井ら、2010；田沼ら、2009）は多いが、在宅看護実習を含んだ報告（片岡ら、2008；工藤ら、2004；松下ら、1995）は少ない。

本学の地域看護学実習は、他の各論実習とのローテーションの中に位置づけられ、市実習と訪問看護ステーション実習を3単位で行うという展開方法で2年が経過した。そこで、この実習形態によって、学生が実習目的・目標に対して、どこまで到達しているのかの学習成果と課題を明らかにし、今後の地域看護学実習の在り方を検討するための資料を得たいと考えた。

Ⅱ. 研究目的

本学の地域看護学実習での実習に関する記録を分析し、学習の成果と課題を明らかにする。

Ⅲ. 地域看護学実習の概要

1. 実習目的・目標

本学の实習目的・目標は表1のとおりである。

2. 実習方法

地域看護活動の領域は、行政、在宅看護、学校保健、産業保健である。本学の地域看護学実習では、保健行政における看護活動の「市実習」と在宅における看護活動の「訪問看護ステーション実習」を展開している（図1）。実習は、3年生の後期から4年生の前期の各論実習の中に位置づけられ、実習期間は3週間である。

地域看護学実習の展開方法は以下のとおりである。

- 1) 地域看護学実習のオリエンテーションでは、特に実習目標、目的を具体的に説明し、地域看護の特徴、地域看護活動の場について、学生に再確認させている。また、図2のイメージ図を使って、公衆衛生看護と在宅看護の位置づけを明らかにしている。

表1 実習目的・目標

<p>〈目的〉</p> <p>地域で生活している様々な健康レベル・ライフステージにある対象（個人・家族・集団・地域）の特性に合わせて展開される地域看護活動を通して、基本的な知識と技術、展開方法を理解する。また、保健医療福祉システムにおける看護職の役割、機能を理解する。</p> <p>〈目標〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 行政における看護活動の実際について理解する <ol style="list-style-type: none"> (1)対象としての個人、家族、集団、地域のヘルスニーズを理解する。 (2)看護活動の実際を通して、保健師の役割と機能を理解する。 (3)保健福祉事業の法的根拠、位置づけを理解する。 2) 在宅看護の展開について理解する。 <ol style="list-style-type: none"> (1)在宅で療養する対象者とその家族の生活に接し、その人のニーズを知る。 (2)対象者、家族のニーズにあわせた在宅看護の展開を理解する。 (3)在宅療養者を支援している社会資源を知り、その活用と看護の役割を学ぶ。 3) 保健医療福祉システムにおける看護職の役割・機能を理解する。 <ol style="list-style-type: none"> (1)地域において看護職と協働して活動する他職種、他機関の役割と機能について理解する。 (2)他職種、他機関との看護職の連携と地域ケアシステムづくりに向けての看護の役割と機能を学ぶ。 4) 地域看護活動の特性を理解し、生活の場における看護の役割を学ぶ。 <ol style="list-style-type: none"> (1)地域で生活している人々の多様なライフスタイル、価値観、健康観を尊重した看護者としての援助のあり方を学ぶ。 (2)行政と在宅における看護活動の実際から、看護の継続性や専門性について考えることができる。

1. 地域看護学実習を「市実習」と「訪問看護ステーション実習」に分ける。
2. 学生16～20名をA・Bの2グループに分ける
3. 実習日程

		月	火	水	木	金
1週目	Aグループ	全体	市実習	市実習	市実習	市実習
	Bグループ	オリエンテーション	訪問看護ステーション実習	訪問看護ステーション実習	訪問看護ステーション実習	訪問看護ステーション実習
2週目	Aグループ	市実習	グループカンファレンス	オリエンテーション	市実習	市実習
	Bグループ	訪問看護ステーション実習			訪問看護ステーション実習	訪問看護ステーション実習
3週目	Aグループ	市実習	市実習	市実習	グループカンファレンス・	実習まとめ・評価
	Bグループ	訪問看護ステーション実習	訪問看護ステーション実習	訪問看護ステーション実習	全体カンファレンス	

* 保健所実習は、別に1日設定

図1 地域看護学実習方法

- 2) 市実習は、母子、成人、高齢者（介護予防）の3つの事業に参加できるように計画し、事業参加前には、事業の法的根拠及び目的、対象者の特性、事業の運営方法について事前学習を行っている。事業の実習前後に、実習対象となる人々がどのような地域で暮らしているのか、地区踏査をおこない、地区把握を実施している。地域看護診断については、3年前期の健康管理論において、大学周辺の地区を選定し、実際に地区踏査や住民へのインタビューを取り入れた演習、グループワークを中心に教授している。
- 3) 訪問看護ステーション実習は、一人の学生が1か所の訪問看護ステーションに4～5日間、訪問看護ステーションの看護師と同行訪問を行っている。実習では、同行訪問したすべての事例のうちから1事例を選び、看護過程の展開を行っている。

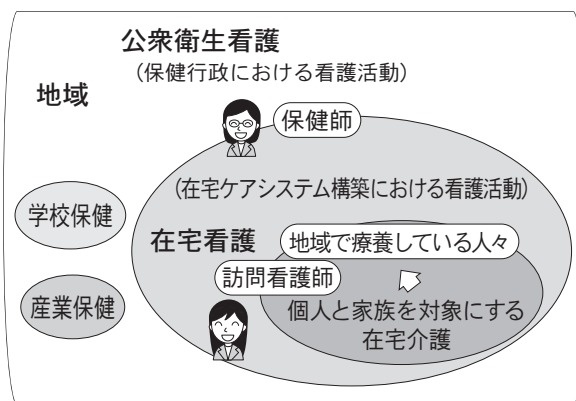


図2 地域看護学実習のイメージ図

IV. 研究方法

1. データ収集方法

平成20年10月6日～平成21年7月24日に地域看護学実習を終了した学生83人および平成21年10月5日～平成22年7月23日に地域看護学実習を終了した学生85人の実習記録・課題レポート、カンファレンス記録をデータとして使用する。

2. データ分析方法

データの分析は共同研究者により以下の過程で行った。

学生の記録、課題レポート、カンファレンス発表の記録内容から実習目標・目的に関わる学習内容を抽出し、学習成果として分類・分析した。

- 1) 地域看護学実習の実習記録・課題レポート・カンファレンス発表結果の記録から、地域看護学実習目標に関連する記述内容を抽出した。
- 2) 抽出する視点は、実習目標に合わせて、行政における看護活動4項目（対象特性、ヘルスニーズ、行政における看護活動の展開方法、保健師の役割と機能）、在宅における看護活動5項目（対象特性、ヘルスニーズ、在宅看護の展開方法、訪問看護師の役割と機能、社会資源の活用と他職種との連携）、保健医療福祉システム3項目（関連職種の役割、社会資源の種類・活用、地域ケア体制における看護の機能）、地域看護活動の特性1項目である。
- 3) 抽出した記述内容の頻度を数量化した。
- 4) 実習目標・目的の到達度の分析は、岡本（2009）の「看護師教育課程（統合分野）における地域看護学の到達レベル」の項目に基づいて行った。

3. 研究対象者

平成20年10月6日～平成21年7月24日に地域看護学実習を終了した学生（18年度生）83人、および平成21年10月5日～平成22年7月23日に地域看護学実習を終了した学生（19年度生）85人で、記録等の使用について同意を得た学生、18年度生45人、19年度生81人の計126人のデータを分析対象とした。

4. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の主旨と内容、研究協力の自由意志、協力を拒否しても不利益を被らないこと、途中辞退の自由、データの匿名性とプライバシーの厳守を確保すること、研究目的以外にデータを使用しないこと等について、文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。なお、本研究は関西看護医療大学の研究倫理委員会の承認を得ている。

V. 結果

1. 実習内容

1) 市実習

市実習については、市の実施している保健福祉

事業に、一人が3事業参加するという方法で、実習内容はほとんどが見学実習であった。

実習した事業については、表2のとおりである。母子保健事業が50.7%、高齢者保健事業が31.6%、成人保健事業は16.6%となっており、認知症家族会といったセルフヘルプグループやまちの保健室の活動を実習できた学生もいた。

2) 訪問看護ステーション実習

訪問看護ステーションの実習では、実習指導看護師と同行訪問を行った。さらに同行訪問した事例から1事例を選び、看護過程を展開した。学生の記録からみると、自分が立案した看護計画に基づいて看護実践できた学生もいたが、ほとんどの学生は計画までで実践・評価には至っていなかった。学生のほとんどが見学実習であったが、バイタルサインの測定や入浴介助などの看護ケアについては、学生自身で看護計画を立案し、実習指導看護師と共に実施していた学生もいた。

実習での訪問対象者の年齢構成は、表3のとおりである。80歳代が32.1%と最も多く、70歳代

表2 市実習における保健福祉事業の参加状況

大分類	事業種別	事業名別	18年度生 n=45	19年度生 n=81	合計	%	
母子 保健事業	健診	4か月児健診	13	22	35	9.4	
		1歳6か月児健診	13	21	34	9.1	
		3歳児健診	22	20	42	11.2	
		10か月児健診	1	7	8	2.1	
		2歳児歯科健診	4	22	26	7.0	
	相談	育児相談（7か月児，2歳児など）	11	22	33	8.8	
		子育て相談（要フォロー者，希望者対象）	2		2	0.5	
		教室	離乳食教室	1	3	4	1.1
			家庭療育支援講座	4		4	1.1
			母親学級	2		2	0.5
小計			73	117	190	50.7	
高齢者 保健事業	介護予防事業	一般高齢者介護予防事業	22	38	60	16.0	
		特定高齢者介護予防事業	16	30	46	12.3	
	その他	在宅高齢者の会		4	4	1.1	
		認知症高齢者家族会・ミニデイサービス		8	8	2.1	
小計			38	80	118	31.6	
成人 保健事業	健診	住民健診（町ぐるみ総合健診）	9	13	22	5.9	
		教室	特定保健指導	14	15	29	7.8
		運動教室（筋力アップサークル）		11	11	2.9	
小計			23	39	62	16.6	
その他		まちの保健室		4	4	1.1	
合計			134	240	374	100.0	

注) 1人3事業の実習だが、台風での事業中止や学生の欠席等の理由により合計が人数(n)×3になっていない

31.0%，90歳代20.3%と高齢者が8割を占めていた。疾患は表4に示したとおりである。難病や脳血管疾患が多く，一人で複数の疾患を抱えていた。

学生の訪問延べ件数は，18年度生が314件，19年度生が517件で合計831件，学生一人あたりの平均訪問件数は6.6件であった。18年度・19年度生の学生一人あたりの訪問件数は，図3のとおりで，最も多いのが4件であり，15件以上も家庭訪問に同行している学生もいた。

継続訪問については，表5のように，2回が83件で，3回以上行っているところも24件あった。

表3 訪問看護ステーション実習年齢別訪問人数

年齢	人数(人)			割合(%)
	18年度生	19年度生	全体	
1歳	1	0	1	0.1
40歳代	0	2	2	0.2
50歳代	3	5	8	1.0
60歳代	33	55	88	10.6
70歳代	99	159	258	31.0
80歳代	113	155	268	32.1
90歳代	60	109	169	20.3
100歳代	0	6	6	1.0
不明	5	26	31	3.7
合計	314	517	831	100.0

表4 訪問看護ステーション実習訪問事例の主な疾患

難病	筋萎縮性側索硬化症・大脳皮質基底核変性症・脊髄小脳変性症
脳血管疾患	脳梗塞後遺症・脳出血後遺症・くも膜下出血
循環器系疾患	慢性心不全・高血圧
呼吸器系疾患	慢性呼吸不全
脳神経系	パーキンソン病・パーキンソン症候群・頸髄損傷
整形疾患	慢性関節リウマチ・圧迫骨折・骨粗鬆症
悪性新生物	舌がん・大腸がん・乳がん・肺がん
腎疾患	慢性腎不全・透析
代謝性疾患	糖尿病
その他	認知症・うつ病・褥瘡・廃用性症候群・閉塞性動脈硬化症

表5 訪問看護ステーション実習継続訪問の回数と延件数

訪問回数	訪問件数(件)		
	18年度生(件)	19年度生(件)	全体(件)
2回	22	61	83
3回	9	12	21
4回	2	1	3

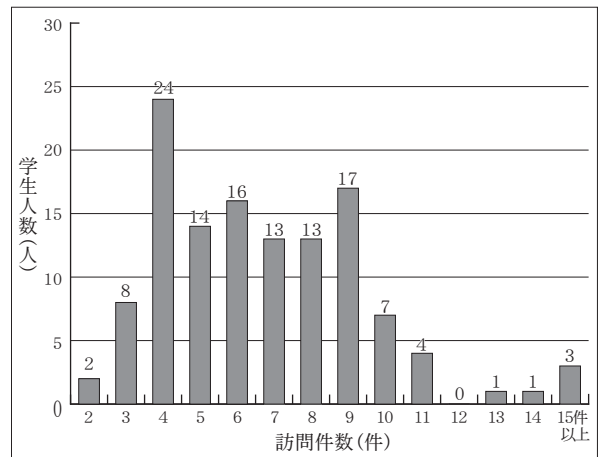


図3 訪問看護ステーション実習一人当たりの学生の訪問件数 (18・19年度生)

2. 学習成果

1) 行政における看護活動

市実習での学びを表6に示した。

対象特性に関しては，「全ての住民が対象で，さまざまなライフステージや健康レベルの人々にかかわっている」という項目が，61件抽出された。

ヘルスニーズの把握に関しては，高齢期に関するものが46件と最も多く，乳幼児期，成人期を合わせると，100件が抽出された。

行政における看護活動の展開方法に関しては，「Plan-Do-Seeサイクル」「個別保健指導技術」「集団保健指導技術」「健康教育における技術」「グループ・地域への支援技術」の5項目が抽出された。「Plan-Do-Seeに基づく事業展開」に関しては23件，「地域看護診断」は13件であった。「個別保健指導技術」では，「共感的態度，傾聴」が27件，「話しやすい雰囲気づくり」が20件であった。「集団保健指導技術」では，「事業内容の工夫」19件，「安全を考慮した事業の運営」が17件であった。「健康教育における技術」では，「媒体の工夫」が12件，「参加者の関心のあるテーマ」が7件であった。「グループ・地域への支援技術」では，「自主グループ育成へ向けての支援」が7件であった。

保健師の役割と機能に関しては13項目あり，「異常の早期発見・早期介入」が19件，「住民の健康と安全を守る」が11件，「エンパワメント」「住民主体の視点」「家族を単位とした保健指導」がそれぞれ7件であった。

表6 行政における看護活動

実習目標	抽出された項目	延べ件数		
①対象特性	全ての住民が対象	<ul style="list-style-type: none"> 地域で生活しているさまざまなライフステージや健康レベルの人々、家庭環境やライフスタイルなど対象者の状況に合わせながら解決策を提案 	61	
	高齢者保健	<ul style="list-style-type: none"> 介護予防事業対象者のヘルスニーズ、特徴 	46	
②ヘルスニーズの把握	母子保健	<ul style="list-style-type: none"> 発育・発達個人差、生活習慣への影響母親の育児不安、父親の育児参加 	36	
	成人保健	<ul style="list-style-type: none"> 生活習慣病の特徴と生活改善の困難性 	18	
	障害者保健	<ul style="list-style-type: none"> 認知症高齢者と家族 	5	
	地域住民の力	<ul style="list-style-type: none"> ボランティアの力、参加者がもつ力 	7	
	Plan-Do-Seeサイクル	<ul style="list-style-type: none"> Plan-Do-Seeに基づく事業展開 地域看護診断 法的根拠に基づいて事業が展開 共感的態度、傾聴 話しやすい雰囲気作り ねぎらい、励まし 継続支援 総合的なアセスメント 問診、アセスメント技術 根拠を踏まえた説明 	23 13 2 27 20 12 11 11 9 9 9	
③地域看護活動の展開方法	個別保健指導技術	<ul style="list-style-type: none"> 個別性に合わせた指導、助言 実現可能な方法の提案 信頼関係の構築 正しい知識の提供 共に考える姿勢 	9 7 7 6 6	
	集団保健指導技術	<ul style="list-style-type: none"> 結果（評価）の返し方の工夫 対象者自身が気づくための支援 相手の強みを生かす 	4 3 2	
		<ul style="list-style-type: none"> 事業内容の工夫 安全を考慮した事業の運営 交流の場づくり・きっかけづくり 集団の中の個へのかかわり 参加者への配慮 	19 17 10 7 7	
		<ul style="list-style-type: none"> 媒体の工夫 参加者の関心のあるテーマ 	12 7	
	健康教育における技術	<ul style="list-style-type: none"> ファシリテーターとしての役割 エビデンスに基づく 事業が順調に流れるよう配慮 事業実施後のカンファレンス 	5 3 3 3	
		グループ・地域への支援技術	<ul style="list-style-type: none"> 自主グループ育成に向けての支援 地域へ広げる セルフヘルプグループへの支援 	7 5 1
			<ul style="list-style-type: none"> 異常の早期発見、早期介入 住民の健康と安全な暮らしを守る 予防の視点 エンパワメント 住民主体の視点 家族を単位とした保健指導 積極的なアプローチ 身近な相談者 パートナーシップ セルフケア能力を高める 俯瞰的な見方と鋭い観察眼 行動変容を促す 体制の整備 	19 11 9 7 7 7 5 4 4 4 4 3 2
	④保健師の役割と機能			

2) 在宅における看護活動

訪問看護ステーション実習での学びを表7に示した。

対象特性およびヘルスニーズに関しては、「在宅で療養する人々には、さまざまな環境、地域特性がある」「療養者らしい生き方を支援するために本人だけでなく、家族、介護者への支援も必要」がそれぞれ44件、「個人や家庭に合わせた対応や指導が必要」「介護者が抱える介護負担」「療養者・家族の主体性の尊重」がそれぞれ17件、「在宅ではその人らしい生活ができる」が16件、「生活の場における看護の提供」が15件、「療養者の価値観や健康観の尊重」が13件であった。

在宅看護の展開方法に関しては、「家庭環境、経済状況に合わせたケア方法の工夫」が71件、「療養者と家族との信頼関係の構築」が51件、「一人での確かな看護判断を行う」が46件、「家族の介護力を高める支援」が28件、「時間内で必要なケアを提供」「対象者のニーズにそったケア計画の立案と実施」がそれぞれ14件、「リスクを予測して予防的にかかわる」が13件であった。

訪問看護師の役割と機能については、「療養者・家族の在宅療養援助」が35件、「家族の介護負担の軽減」が24件、「契約による看護の提供」が17件、「QOLの維持・向上への支援」が13件、「継続看護、退院支援」が12件であった。

社会資源の活用と他職種との連携については、「社会資源の把握と活用」が27件、「他機関・他職種との連携」が23件であった。

在宅看護では、病院における看護と比較して考える学生が多く、在宅ではさまざまな家庭環境があること、経済的な問題も含めて看護しなければならないことに多くの学生が気づいていた。訪問看護師の役割と機能では、療養者だけでなく家族を含めて看護の対象であることや家族の介護負担の軽減について、ほとんどの学生が学ぶことができていた。訪問看護の特徴として、契約による看護であること、一人で看護判断しなければならないこと、他職種と連携特に介護職など医療職以外の人たちとの連携の取り方についても学んでいた。また、「病院入院時から在宅に帰ったことを考えて看護する視点」が必要という継続看護についても学ぶことができていた。

3) 保健医療福祉システム

保健医療福祉システムに関しては、市および訪問看護ステーション実習からの学びを表8に示した。

関連職種の役割では、「関連職種の専門性を活かす」が31件であった。保健・医療・福祉分野における連携の概要では、「情報交換、情報共有し、同じ方向性を持って支援」が46件、「他職種と連携し、住民の生活環境を整えていく」が46件であった。

地域で利用できる社会資源の種類・活用では「社会資源の有効活用」が11件であった。

地域ケア体制の充実に向けた看護の機能については「健康生活を守る市民活動における市民との連携」が18件であった。

4) 地域看護活動の特性

市および訪問看護師ステーションにおける地域看護活動の特性に関する学びを表9に示した。

「生活を尊重した看護」が41件、「看護の継続性」が26件、「価値観を尊重した看護」は17件であった。看護の専門性では、「予防的にかかわり」「幅広い視点と知識」がそれぞれ12件、「家族を単位としてかかわる」が10件、「住民主体」が6件であった。

3. 学習の到達度

岡本（2009）が提示している「看護師教育課程（統合分野）における地域看護学の内容と到達レベル」に基づいて、学生の到達レベルを、「○：知識として理解できた ×：知識としての理解が不十分」とし、各項目について分析した結果を表10に示した。

統合分野における看護師教育課程での地域看護学の学生の到達レベルは「①知識の概要を獲得する ②主要な概念を理解し、主要な方法やいくつかの実際例を知る」としている（岡本，2009）。学生の到達レベルとしては、10項目中8項目が「知識として理解できた」という到達レベルに達していたが、地域看護管理の視点であるヘルスケアシステムに関する学びが抽出されておらず、「知識としての理解が不十分」という結果であった。

表7 在宅における看護活動

実習目標	抽出された項目	延べ件数
①対象特性・ヘルスニーズを知る	・在宅で療養する人々にはさまざまな環境，地域特性がある	44
	・療養者らしい生き方を支援するために本人だけでなく，家族，介護者への支援も必要	44
	・症状や家族環境はさまざまなので，その個人と家庭に合わせた対応や指導が必要	17
	・介護者が抱える介護負担	17
	・療養者・家族の主体性の尊重	17
	・在宅では，その人らしい生活をおくることができる	16
	・生活の場における看護の提供	15
	・療養者の価値観や健康観の尊重	13
	・対象者が暮らすコミュニティがケアの対象	1
	②在宅看護活動の展開方法	・家庭環境，経済状況に合わせたケア方法の工夫
・療養者・家族との信頼関係の構築		51
・一人での確かな看護判断を行う		46
・家族の介護力を高めるための支援		28
・時間内で必要なケアを提供		14
・対象者のニーズにそったケア計画の立案と実施		14
・リスクを予測して予防的にかかわる		13
・根拠に基づいた説明		8
・危機管理体制の整備		6
・残存機能を生かしたケアの提供		4
③訪問看護師の役割と機能	・療養者・家族の在宅療養援助	35
	・家族の介護負担の軽減	24
	・契約による看護の提供	17
	・QOLの維持・向上への支援	13
	・継続看護・退院支援	12
④社会資源の活用・他職種との連携	・療養者と家族間の調整	4
	・訪問看護師に必要な能力	4
	・社会資源の把握と活用	27
	・他機関・他職種との連携	23

表8 保健医療福祉システム

実習目標	抽出された項目	延べ件数
①関連職種の役割	・関連職種の専門性を活かす	31
②保健・医療・福祉分野における連携の概要	・情報交換，情報共有し，同じ方向性を持って支援	46
	・他職種と連携し，住民の生活環境を整えていく	46
③地域で利用できる社会資源の種類，活用	・社会資源の有効活用	11
④地域ケア体制の充実に向けた看護の機能	・健康生活を守る市民活動における市民との連携	18

表9 地域看護活動の特性

実習目標	抽出された項目	延べ件数
①生活を尊重した看護	・生活状況を把握する，生活に視点を置く，生活スタイルにあわせる	41
②看護の継続性	・継続看護の視点，継続したフォローの視点	26
③価値観を尊重した看護	・対象者の価値観ややり方に合わせる	17
	・予防的かかわり	12
	・幅広い視点と知識	12
④看護の専門性	・家族を単位として関わる	10
	・住民主体	6
	・対象者を取り巻く環境に働きかける	4

表10 看護師教育過程（統合分野）における地域看護学の内容と到達レベル

○：知識として理解できた ×：知識としての理解が不十分

理解・習得する内容	看護師教育課程（統合分野）	
	地域看護学	
学生の到達レベル	①知識の概要を獲得する。 ②主要な概念を理解し、主要な方法やいくつかの実際例を知る	到達レベル
1. 主な活動の目的	個人・家族のヘルスニーズ、疾病予防	○
2. 主な活動の対象	地域で生活する個人・家族	○
3. 対象把握の方法	相談、スクリーニング	○
4. 関わるニーズ	特定された個人の健康課題（健康の保持増進・健康障害の予防面が中心）	○
5. 情報収集とアセスメントの内容	地域社会における生活に関わる情報、成長発達段階別のアセスメント	○
6. 設定するゴール	対象の個別の健康課題の解決、QOLの向上	○
7. ヘルスケア提供組織の中での看護の展開	健康障害の予防と健康生活の支援、およびケアマネジメント、調整機能の理解	○
	ヘルスケア提供組織の種類、仕組みの理解	×
	保健・医療・福祉・介護サービス提供にかかる運営、法的・経済的背景の理解	×
8. 特定の健康課題をもつ人への看護	ライフサイクル各期の健康課題に応じた支援活動、保健活動についての概要を理解	○
9. 協働・連携と役割	ヘルスケア提供組織との協働・連携	○
	ヘルスケアチームの一員としての役割	○
10. 社会資源の知識と活用	地域にある社会資源を知る（種類、窓口、内容）	○

（岡本（2009）のp.754，表2「看護師教育における地域看護学の内容」を改編し作成）

VI. 考察

市実習では、母子保健，成人保健，高齢者保健の3事業に参加することで，母子，成人，高齢者といった幅広い年代層の人々に接することができ，それぞれのライフステージにおける特性や発達課題が比較できていた。また，訪問看護ステーション実習では，対象者は70歳代から90歳代が多く，高齢期の療養者とその家族に対しての看護が実習できた。疾患としては，難病や脳血管疾患後遺症が多く，医療保険や介護保険制度を利用している要介護の方が対象となり，ガンや老衰といったターミナル期の人も訪問していた。このことから，学生は市および訪問看護ステーション実習を通して，地域にはさまざまな健康レベルの人々がいること，地域特性や家族を含めての生活背景による個別性があり，そのことを踏まえての看護介入や疾患を持たない健康な人への地域看護活動について学ぶことができていたと考える。

岡本（2009）は，「地域看護学においては，まず個のかかわりを出発点として，集団における個，地域における個の健康と生活を支援するための知

識と技術を理解することが重要」と述べている。看護活動の展開方法に関して，行政の看護活動では，「個別保健指導技術」「集団保健指導技術」「健康教育における技術」「Plan-Do-Seeサイクル」「グループ・地域への支援技術」といった5項目が学習成果として抽出されており，学生は，個へのかかわりだけでなく集団，地域の視点で関わっているということを学ぶことができていた。

一方，在宅の看護活動は，療養者らしい生き方を支援するために，本人だけでなく家族，介護者への支援といった療養している人と家族が対象という個・家族の視点で看護展開しているという学びが多かった。このことから，個のかかわりを出発点として，集団における個，地域における個の健康と生活を支援するための知識と技術を理解できたのではないかと考える。

学習の到達度は，「統合分野における看護師教育課程での地域看護学の学生の到達レベル10項目」のうち8項目が達成されていた。このことから，本学の地域看護学実習の学習成果としては，「①知識の概要を獲得する ②主要な概念を理解し，

主要な方法やいくつかの実際例を知る」という統合分野における看護師教育課程における地域看護学の到達レベルには達しているのではないかと考える。

社会資源の活用や関連職種との連携に関して、片岡ら（2008）は、地域看護学実習での学生の学びとして「連携・協働」というカテゴリは抽出されたが、抽象的な内容が多かったと報告している。本学の学習成果をみると、さまざまな専門職種との連携を具体的に学べており、看護活動の視点がひろがったのではないかと考えられる。しかし、地域看護管理の視点であるヘルスケアシステムに関しての学びが抽出されていなかったことから、「ヘルスケア提供組織の種類、仕組みの理解」「保健・医療・福祉・介護サービス提供にかかる運営、法的・経済的背景の理解」の項目は、まだ学べていないと思われる。

地域看護活動で共通している特性としては、生活を尊重した看護、看護の継続性、価値観を尊重した看護といった学びがあった。このことから、地域看護活動の対象は、地域の中に住んでいる人々、病院や施設に入院している人も地域に住んでいる人たちであり、住み慣れた家がある、そこで生活していたあるいは今後地域に帰って生活していくという生活の場の看護であり、価値観を尊重した看護の大切さが理解できたと考えられる。

在宅場面での看護技術の実践について大村ら（2006）は、1週間の訪問看護ステーション実習において学生の経験した看護技術は、バイタルサインの観察、オムツ交換、体位変換、清拭といった療養上の世話に関する看護技術と関節可動域訓練といった診療の補助に関する看護技術が多く、手順を覚えただけでは在宅場面で実際に援助することは難しいと報告している。本学の学生が在宅で実際に提供した看護技術については、今回調査をしていないので比較はできないが、在宅場面での看護技術の実践指導については今後の課題である。

VII. 今後の課題

学習成果の分析から、本学の地域看護学実習の実習目的・目標は、ほぼ達成できていたが、課題として次の3点が明らかになった。

1. 在宅看護実習においては、看護診断に基づいて看護展開をしているが、訪問看護ステーションの実習期間中に実施・評価までできないこと、ほとんどが見学実習になるため、看護過程の展開や在宅看護技術の獲得は難しい。
2. 実習の場での看護展開や保健指導技術に関しては学べているが、それが地域の中でどのようにつながっているのかという地域のヘルスケアシステムを含めて、地域看護管理の視点での学びがされていない。
3. 生活体験の乏しい学生にとって、在宅で療養している人、地域で生活している健康な高齢者や乳幼児、健康増進や予防といった疾患を持たない健康な人への看護活動をイメージした上で実習に望むことが困難であった。

このことから、今後の地域看護学実習の検討課題を次に示した。

1. 在宅場面で実際に学生が看護技術を提供することは、訪問看護という制限された時間の中ではかなり難しいが、病院実習で技術習得したあとに在宅看護実習を位置づけるといった実習時期の検討をする。また、看護過程展開の学習支援のために、実習後のカンファレンス内容・方法の検討をする。
2. 在宅・病院・施設・地域での看護職の役割や連携のとりかた、地域に存在する関係機関の役割とネットワークといった地域看護管理の視点やヘルスケアシステムの理解を強化するために、保健所や地域包括支援センター、老人保健福祉施設、障害者施設など地域にある関連施設の実習を取り入れる。
3. 地域で生活する健康な人々を学生がイメージできるように、各論実習の前に健康な人々とふれあえるような場を提供する。

謝辞

本研究にご協力くださいました卒業生および学生の皆様に心より御礼申し上げます。また、この研究をまとめるにあたり、ご指導いただきました先生方に深く感謝いたします。

参考文献

- 安齋由貴子 (2009)：大学教育における保健師教育課程の問題点－卒業時の到達度の視点から－，日本公衆衛生雑誌，56(11)，pp.821-824.
- 藤丸知子，椀勇三郎，佐藤祐佳，兒玉尚子，西田和子 (2006)：地域看護学実習の評価と今後の課題，保健師ジャーナル，62(6)，pp.494-500.
- 藤井可苗，菅野夏子，中村有美子，小野ツルコ (2010)：統合カリキュラムにおける地域看護学実習前後でみた保健師教育の技術項目到達の変化，第13回日本地域看護学会学術集会講演集，p.207.
- 五十嵐久人，尾上佳代子，鶴田来美，長谷川珠代，風間佳寿美 (2007)：地域看護学実習における実習経験内容と自己評価，南九州看護研究誌，5(1)，pp.61-65.
- 石田千絵，河原加代子，高石純子，入江慎治，杉本正子 (2004)：統合カリキュラムにおける地域看護学実習のあり方，日保学誌，7(3)，pp.139-147.
- 伊藤直子，重松由佳子，布花原明子，山田小織，鹿毛美香，能見潤子，石井美紀代 (2004)：地域看護学実習における地域看護活動の展開スキルの学習内容，西南女学院大学紀要，8巻，pp.36-44.
- 片岡三佳，普照早苗，松下光子，藤澤まこと (2008)：地域基礎看護学実習終了後のレポート分析からみた学生の学び，岐阜県立看護大学紀要，8(2)，pp.3-10.
- 小西美智子 (2006)：大学教育において保健師ライセンスに何を求めるのか，保健師ジャーナル，62(6)，pp.468-472.
- 工藤節美，宇都宮仁美，時松紀子，大村由紀美 (2004)：看護の視点の広がり育成するための地域看護学実習，大分看護科学研究，5(2)，pp.21-26.
- 松下由美子，神山幸枝，郷間悦子 (1995)：地域看護学実習の学習成果と課題，自治医科大学看護短期大学紀要，第4巻，pp.33-41.
- 村嶋幸代 (2009)：保健師教育の問題点と日本公衆衛生学会「公衆衛生看護のあり方委員会」の活動，日本公衆衛生雑誌，56(9)，pp.692-696.
- 岡本玲子 (2009)：看護師教育課程に必要な地域看護学，保健師教育課程に必要な公衆衛生看護学－前者の教育内容と看護師の指定規則への提案－，日本公衆衛生雑誌，56(10)，pp.750-757.
- 大場エミ (2008)：臨地実習の今日的な課題，保健師ジャーナル，64(5)，pp.400-403.
- 大川聡子，松尾理恵，和泉京子，都筑千景，佐々木八千代，上野昌江 (2006)：地域看護学実習における学生の学びとその到達点の検討，大阪府立大学看護学部紀要，12(1)，pp.93-101.
- 大村由紀美，秦桂子，時松紀子，中村喜美子 (2006)：訪問看護ステーション実習における学生の看護技術経験の実態，看護科学研究，6巻，pp.27-32.
- 小山田恭子 (2009)：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会，保健の科学，51(10)，pp.652-655.
- 菅原京子，後藤順子，太田絢子，関戸好子 (2008)：地域看護診断を主要な目標とした実習，保健師ジャーナル，64(5)，pp.420-425.
- 田沼寮子，佐々木明子，森田久美子，新井久美子，滝澤伸憲 (2009)：保健師の育成のための教育の技術項目と授業・実習修了時の到達度からみた学生の学び，お茶の水看護学雑誌，4(2)，pp.26-33.
- 辻よしみ，高嶋伸子，合田加代子，大池明枝 (2004)：地域看護学実習の展開方法の検討，香川県立保健医療大学紀要，1巻，pp.123-128.